慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会思想家としてのウキリアム・モリス (一)
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.7 (1921. 7) ,p.1042(130)- 1051(139)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210701-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

"Grundherrschaft und Rittergut." (1897)の批評である。

(註11) Palgrave's Dictionary of Political Economy, vol. ii. (1896) 參（Ashley）の論文 "Historical School of Economists." を比較せよ。「原註」

此の點のみに就いて見れば歷史學派の法則は濟經學派のそれと異なる。然し其の「動的」な變化の法則に就いて更に一層考究を重ねる必要があるだらう。

(註三) Gustav von Schmoller:—"Zur Litteratur geschichte der Staat- und Sozialwissenschaften." p. 279.「原註」

(註四) ibid. p. 293「原註」

(註五) Matthew Arnold (1822-88) は英國の有名な詩人、批評家にして又敎育家である。

(註六) Karl Menger:—"Die Irtümer des Historismus in der deutschen Nationaloekonomie." pp. 26, 37.)「原註」

(註七) ibid. pp. 27, 37.「原註」

(註八) ibid. p. 40.「原註」

(註九) 最後の節は Ashley が Harvard 大學の就職講演としてのみ意味がある丈けである。然し學問の獨立、大學の自由は以つて吾人の學ぶべき點であらう。（未完）

社會思想家としての ウヰリアム・モリス（一）

加田哲二

私は本誌五、六兩月に渉つて「八十年代の英國社會主義」と題して、千八百八十年代において英國社會主義復活の豫備條件となつたものに就いて聊か述べるところがあつた。そうして更に同時代の社會主義運動並に學說が如何なる發達をなしたかを明かにする積りであつたが、雜誌編輯の都合上、一先づ社會主義復活の豫備條件だけを論ずるに止まつた。以下に論及しやうとする「社會思想家としてのウヰリアム・モリス」はその續編の一部と見るべきものである。ウヰリアム・モリスは四十幾才のときまでは單なる藝術家として暮してゐたのであるが、このさきに至つて始めて社會思想家、社會運動家として活動するに至つたのである。そうして藝術の門外漢である私にとつては彼の藝術を詳細に論ずることが出來ないから、そは彼の社會思想と關係のある範圍においてのみ記することとする。

一

思想家藝術家の生涯は概ね外面的に變化の乏しい生涯である。モリスの生涯も、その內面的には幾多の變化のあつたにも拘らず、外面的に表はれたところは、甚だ劇的場面に乏しい。彼の生涯を通觀して普通の傳記讀者をして快哉を叫ばしめるところは甚だ少ないのである。けれども人間の價値は單なる世間的成功を以て計らるべきではない。傳記讀者は數奇なる運命に對する興味よりも、人間の內的生活の記述によつて敎へられるところが多いのである。かゝる意味から云つてモリスの生涯について筆を起すことは無益のことであるまいと思ふ。

モリスの一家はウエルス人の子孫であつた。彼の故鄉はSevern河の流域の風光明媚な所で、その地方の云ひ習はしで云ふやうに「世界中一番靜かな所」"The quietest places under the sun." であつた。モリスの祖父は十八世紀の後半に商賣のために、Worcester に移つて、そこの市民となつたのである。彼はすべてのことに非常に秀でた人で、また甚だ信仰が深かつた。こゝで彼は、當時退職海軍々醫で Nottingham に開業してゐた Charles Stanley 博士の娘 Elizabeth を娶つた。この夫婦の間に第二子 William Morris の生れたのが、千七百九十七年七月十四日のことであつた。この William Morris が後年藝術家として社會思想家として有名になつ

た William Morris の父である。この大 Morris は、父が商賣上の關係からロンドンへ移つたので、千八百二十年頃ロンバアト・ストリートの手形割引業者である Harris, Sanderson, and Harris の商會へ書記として入社した。Harris 家はクエーカー宗徒で、Morris 家とは親類關係があつたのである。William Morris は三十歳を過ぎる幾何もなく、その商會の組合員となつた。其の頃その商會は Sanderson & Co. として知られてゐたのである。當時における手形割引業は競爭も少く、社會上の地位も銀行業者に次いだもので、その生活も樂であり、中には富豪の生活を送つたものもあつた。彼は組合員になると間もなく Worcester 附近の人 Joseph Shelton の娘 Emma と結婚した。Shelton 家は十六、十七世紀は繁榮した商人であつた。さうしてその一家からは敎會や裁判所に勤めたものもあつた。Morris 夫人の祖父である John Shelton は Worcester 僧正管區の高位の僧侶（Proctor of the Corsistory Court of the diocese of Worcester）であつたが、彼の家族は大變音樂に趣味を持つてゐて、その二兒は Worcester Cathedral と Westminister Abbey の樂僧となり、第三子 Joseph は同じく藝術のために身を捧げた。Morris 家と Sheltons 家との間は遠緣に當つてゐて、お互に親しく交際してゐたので、William Morris と Joseph の末の娘 Emma との結婚は極めて自然のことであつた。この夫婦は居を Lombard Street に定めて、こゝで千八百三十年と千八百三十二年とに二人の娘を生んだ。翌年彼等は市中に住むことを止めて、Epping Forest から約一哩のところの Lea 河の流域を見渡してゐる美しい Essex の Walthamstow に移つた。この Walthamstow の Elm House で千八百三十四年三月二十四日に生れた男の子が我が詩人にして社會運動家である William Morris であつた。これ等の二人の姉の外に William は四人の弟と二人の妹を持つてゐた。

Shelton 家の血統には永生で身體のよい質の人々が多かつたが、Morris 家の方では肉體的に甚だ丈夫であるとは云へなかつた。彼の父も祖父も比較的早くこの世を去つた方であつた。さう云ふ血統から出たためか William Morris の幼少年時代は、その後年の健康にも似ず、甚だ弱々しいのであつた。この病身であつたと云ふことが、彼をして早くから本を讀むこと覺えしめたのである。彼は實に四才にして既に小說を讀んでゐる。Wm Morris の姉は、彼がその監督の下に少し許りの讀み書しか敎はらなかつたと云つてゐる。彼自身も彼が讀書するやうになつたのは何時頃からかは記憶してゐないのであつた。

彼の父母の業は年と共に繁榮に赴いて、彼等は既に巨萬の富を積んだ。そこで千八百四十年には彼等は Walthamstow の家を去つて Epping Forest の向ひの Woodford Hall の可成立派な家に引き移つた。それは Wm Morris 六才のときであつた。この美しい Epping Forest の自然の中で Morris は、自然に對する觀察と愛とを養つたと共に、幼年時代の弱々しい體質から段々と壯健な身體に鍛へられて行つた。彼の幼時からの樂しみであつた讀書には益々時間を費すやうになつた。少年の William は Marryat のものや、Lane の Arabian Nights や Waverlly の小說を讀み耽つた。また彼にとつて中世紀を愛する念は生れつきのものであつた。彼がその父と共に八才のとき訪ふた Canterbury の寺院のゴシック建築は彼に甚だ著しい印象を與へた。同

じ日に彼は Thanet の Minister 教會を訪問して千八百四十八年の彼の父の死に至るまで寄宿生ゐるが、彼の鋭い觀察眼は、このゴシック建築として在學してゐた。

を、五十年隔つた時において尙ほ、明白に記憶父 William Morris はその死に先立つて、その子のために、Marlborough College へ入學するを辿つて書き得たのであつた。斯くの如く中世の便宜を計つて置いた。その學校は、その設立紀のものに對する彼の好愛は殆んど本能化して趣意書によると「王國中の鐵道幹線の一大交錯ゐるのである。(The Life of William Morris by 點たるべき Swindon から約十二哩しか離れてゐJ. W. Mackail in two Volumes. Volume I. pp. ないので、英國のすべての場所から集まるのに1-11. Longman's Pocket Edition.)便宜な中央の、さうして健全なる地點」にあつ

II

た。それはともかくとして、この地は英國中の

Morris は九歳にして始めて、組織的の教育を最もローマンチックな、美しい場所の一でその受けることになつた。彼は始め Arundale 孃等附近には豐富な史跡と歷史以前遺跡とがあつによつて經營されてゐた Walthamstow の「若い た。Epping Forest の附近で幼年時代を送つた紳士となるための豫備學校」に送られた。この Morris には、その少年時代を、この美しい Saver-學校は彼の家から約一哩位のところにあつたの nake で送るのは、非常に適當なことであつた。で、彼は小馬に乘つて通つた。十二年の後 Arun-

Morris は千八百四十八年二月、まだ十四才にdale 孃は學校を Woodford の George Lane に ならなかつたが Marlborough College へ入學し移した。Morris は始め通學生であつたが、後に

た。彼はこゝに千八百五十一年のクリスマスまで在學してゐた。Morris の入學した當時のこの學校は、まだ創立後間もなかつたので、隨分混亂してゐたものであつた。(學校創立は千八百四十三年) 全英國から二百の生徒が、この創立したての傳統もなく組織もなくさうして資金も不充分な學校に雲集した。けれども學校に對する需要の增加は、學期毎に學生の數を增加して行つた。始めの三年間で生徒は二倍になつた。千八百四十八年の始めに Morris と共に入學した生徒は百人を越してゐた。その學校のある町は極めて靜かな所であつた。學校の組織の不充分なことは、現今の生徒よりも大なる自由を、彼等に與へたのである。少數の者はクリケットとフートボールとをして遊んだ。ある者達は遊び時間に附近の山や野原を散步した。一定の服裝もなく完全な組織もなかつた。斯樣な自由な無組織の教育は普通の生徒にとつて、その結果如何と云ふ事になると甚だ多く疑問の餘地を殘してゐる。けれども個性の强い、天分の豐かな者にとつては斯樣な組織は可成の利益を齎らすものである。完全なる組織と軍隊的敎練とは、彼等の尊い個性を擦滅らすことになるのである。

彼はこの學校生活の間にあつて孤獨を喜んだ。彼はクリッケットもフートボールもしなかつた。夏休暇には Savernake の森を散策したり、Downs 河に船を浮べたりして過ごした。色々の史跡を迹つて彼は色々と過去の美を空想に描いたのであつた。またこの學校の圖書館には考古學や宗教的建築に關する書籍が揃つてゐた。彼は片端から讀破して行つた。彼の比較力は甚だ顯著なもので、彼は後に至つて、Marlborough を去つた時ときには、立派な考古學者で、英國のゴシック建築に關するあらゆる事柄を知

つてゐたと云ふのを常とした位である。この教會に關する興味は、英國カソリック運動の影響によつて、尙ほ强めたのである。この學校は宗教的團體によつて設立されたのではなかつたが、高教派的色彩を持つてゐた。Biore の寺院は朽ち果てゝゐたが、Morris が Marlborough へ來たときには建築の最中で翌年の秋に開館したときには熟練した唱歌隊が組織されたのである。この古風の教會音樂は中世建築と同じやうに Morris の心に共鳴するところがあつた。前代に始まつたローマンチシズムの運動は Scott の小說から多大の刺激を受けて、アングロ・カソリック主義の中に入つて來た。Morris はその學校を去るときに既にアングロ・カソリック主義者であつたのである。

Marlborough での一學友は、この頃の Morris を次のやうに描いてゐる。「高いカラーと黑い縮毛の頑丈で强さうな、氣質のよい親切な、然も肯かぬ氣の少年」であつた。また他の一人によると、彼は遊戲などには少しも加はらないが、鳥の玉子を集めるのが上手であつた。彼は何時でも手を動かしてゐた。さうして常に編物に餘念がない。教室の机に一方を縛つて數時間の間編物をする。彼の指は殆んど自働的に動いたのであつた。彼と共に入學した Fearson 氏は獨言を云ふのが好きな、さうして外の生徒達から氣が少し變だと思はれてゐた彼を記憶してゐる。彼は散步をするときに、何時も「武士と仙女について」の永い話をした。話はそれから、それへと發展して、仲々盡きるところがなかつた。さう云ふ少年で彼はあつた。

父 Morris の死後 Woodfall Hall は、その遺族のためには、あまりに大き過ぎた。それで、千八百四十八年の秋に、彼は、その家から半哩離れて、Woodford から Tottenham への道路に添ふた家へと引越して行つた。この頃の Morris の書いたもので今尙は存在してゐるものは、彼の妹 Morris に與へた書翰である。それはこの年の十一月一日附のもので、新しい家のことを詳しく書いて寄越して呉れと云ふのであつた。この書翰の結末に少年の Morris は云つてゐる。「休暇までには、もはや七週ほどしかない。私はまたそこへ行かう。私は何時も休暇のことを長々と書く、お前はきつと私のことを何時も家のことを許り考へてゐる大馬鹿だと思ふだらう。けれども私はさうせずにはゐられないのだ。私は私の見、且つ云ひ、さうして行ひたいと欲してゐる運命があるからと云つて、私はそれを自分の缺點だとは考へない。」彼はその姉妹に對して溫い感情を持つてゐた。「彼が愉快な周圍を發見したのは家庭であつて、學校ではなかつたのである」(Mrs. Townshend, William Morris and the Ideal of Communism. p. 2. 甲野哲二譯モリス評傳、雜誌批評一九二〇年十二月號二頁)

姉の Emma Morris は一年の後に高教派の僧侶 Joseph Oldham と結婚した。彼は千八百四十五年から四十八年まで Walthamstow の牧師補であつた Oldham 氏は結婚の當時既に Kent の Downe の牧師補で、間もなく Derbyshire に住むことを命ぜられた。かくて William Morris はその最愛の姉と屢々相會ふことが出來なくなつたのである。彼はその離別を痛切に感じた。その姉弟は、その思想において、その熱情において、全く相似てゐた。彼が將來僧侶になる積になつたのは、幾分かは彼女の感化に負ふところがあるのである。

この目的から云へば、Marlborough から Oxford へ移るのは極めて自然である。さうしてまた

Marlborough の出身者が Oxford では Exter College に入學するのが順序である。Marlborough の教師の中の數名は Exter の出身者であるから。Morris は學校では成績のいい方ではなかつた。彼は學問よりも玩具の玉子と古代の教會のことについてより詳しかつた。それに Wilkinson 博士の管理の下にあつたときの學校の狀態は滅茶々々であつて、千八百五十一年の十一月には遂に學校騷動が起るに至つた。そこで彼はその年のクリスマス限り退學することになり、家庭教師について學ぶこととなつた。家庭教師としては牧師 F. B Guy 氏が選ばれた。彼は學識人格共に高く、その Morris に及ぼした影響は大なるものがあつた。彼は Walthamstow の Forest School の助教員で、Morris とは約一年程一處にゐた。彼は典型的な高教派の僧侶で、同情心に富み、高尚な趣味を持ち、繪畫と建築に對しては深い造詣があつた。この人の指導の下に Morris は古典の智識を可成得たのである。

當時の學友 W. H. Bliss 氏は Morris のことを記してゐる。彼等は日々森に行つた。Morris は他の少年がロンドンで一日の遊樂に耽りに行くときに、獨りでこの森の中を散策した。Wellington 侯の葬儀の日も、多くの少年がその盛儀を見やうとしてロンドンへ出掛けて行つたのに拘らず、彼一人 Waltham Abbey へ馬を走らせたのであつた。

Morris は千八百五十二年の六月 Oxford に行つて、Exter の入學試驗に通過した。それは夏休暇後直ちに入學する豫定であつたからである。けれども學校が滿員の狀態にあつたので、翌年の春（The Lent term）まで延期しなければならなかつた。彼は Guy 氏のところへ歸つて來て、尙ほ六ヶ月勉學した。夏休暇には彼と共に Devonshire と Alphington へ行き、歸つてからは Walthamstow の家に暮した。Exter の試驗場で彼の隣席へ座つた少年は Birmingham King Edward's Grammer School から、同じ目的で來た少年で、Morris の生涯を通じての親友となつた Edward Burne-Jones であつた。（Mackail, Life, Vol. I. pp. 12-28）

新刊紹介

米國の通貨收縮論

E. W. Kemmerer-High Prices and Deflation. ppxII. 84.

プリンストン大學の教授ケムメラー氏は米國現代の經濟學者中、通貨に關する知識の豐富である點に於て、第一人者を以つて、許すに値する。歐洲戰爭中、氏は通貨膨脹と題する論文を「アメリカン、エコノミック、レヴュー」に掲げて、此問題に就て、氏の理解の如何に公正であるかを明にした。本書は通貨膨脹、物價騰貴幷に通貨收縮の三章より成る。前二章に於ては、今日の如く米國に於て物價に騰貴を來し、生活費の昂騰を招いた原因を以つて、一に通貨の膨脹に歸した。而して氏が通貨を以つて所謂預金通貨をも含むものと解釋して居ることは、氏の曩に公にした論文を一讀した者の認める所で